

夏の淫獄

サンプル版

妄想虜囚

目次

第六章	94
第五章	72
第四章	63
第三章	47
第二章	35
第一章	3

第一章

電車はまだ来ない。

時刻は夕暮れ、夏も終わりに近づきつつあるが、まだ日差しは強く、太陽の光が眩しい。ふたりの少女が駅のホームに佇たたずんでいた。どちらも半袖のセーラ服姿でバックを抱えている。先ほどからやや小柄な少女が、もうひとりの少女に何やら盛んに話しかけていた。

「麻衣先輩、知ってますか？ 駅前のアイスクリーム屋さんで、この地域だけの限定商品
を売ってるんですよ、今度、一緒に行きませんか？」

「そうなんだ。でも私アイス好きだし……」

「アイス好きなら行きましょうよ。期間限定だし、早く行かないとなくなっちゃいますよ」

「彩奈ちゃん、好きだからダメなんじゃない、ハマったらどうするのよ」

彩奈と呼ばれた少女は、この春になぎなた部に入部したばかりの新入生だ。だが先輩に対して遠慮をする素振りはない。彼女は先ほどからまるで麻衣をデートにでも誘うかのように、次から次へと話題を振り麻衣の歡心を買おうとする。無理もない。学園中の憧れの的である麻衣とふたりつきりなのだ。

どちらもかなりの美少女だった。彩奈は小動物のように、キョロキョロと小首をかしながら、肩まで伸びた黒髪をためかせ、麻衣へ質問を投げかけている。麻衣の反応によつて不安気になったり、嬉しうれしそうにしたり、表情を豊かに変化させるのが可愛らしい。

一方、麻衣はストレートボブの襟足を綺麗きれいに揃そろえた清潔感のある髪型で、背筋がピンと張った美しい立ち姿だ。なぎなたの名手である麻衣はセーラ服姿ながら、女性武道家らしい凛りんとした輝きを放っていた。

麻衣は双子の姉である亜衣と共に、天神の護まもり手である巫女でもあった。神社で時折見せる、その神々しいまでに美しい巫女姿を見た者は幸運と言えよう。眼福にあずかった者からその美しさは伝聞となつて広がり、この地域では伝説の美少女として知られていた。ホームを行き交う人々もちらりと見てはその美しさ、可愛らしさに目を奪われていた。

そしてその可憐かれんさからは想像もつかないが、彼女は人知れず鬼獣淫界の鬼共と戦い、人々の安寧を守る戦士でもあるのだ。

彼女達のとりとめのない会話が一段落したところで麻衣が呟つぶやく。

「それにしても遅いわね」

「そうですね、麻衣先輩」

彼女たちは武道の勉強会を行うため隣町の他校へと訪問した。麻衣が講師となり、技の指導を行ったのである。天津姉妹の名は勇名を轟とどろかせており、彼女たちの亡き祖母、幻舟はこの辺り一帯を収める長老としてのみならず、武道家としても高名であった。各校の顧問、師範代から是非にと招かれたのである。

今はその帰路の途中だ。電車に乗るため駅のホームにいるが、いつまでたっても電車は来ない。田舎の本数の限られた路線であるから、事前に時刻表は確認していたが、その時刻をとうに過ぎても電車の来る気配はない。

彩奈は電車が来ないのがむしろ嬉うれしいようで、屈託の無い笑顔でまた麻衣に話しかける。彩奈は麻衣の付き人役として同行した。付き人役に指名されたときは歓喜した。亜衣が所用により同行できなかったのは残念だが、むしろ麻衣とふたりつきりで過ごせる

のだから、僂倖ぎようこうと言えた。付き人役は毎回違う部員が選ばれる。残り少ない時間を惜しむように、他の友人達が知らない、麻衣のプライベートな情報を聞き出すべく話し続けた。

(やつぱり麻衣先輩、ステキだったな。明日はみんなに自慢してやろう)
彩奈は先刻の勉強会での麻衣の姿を思い出していた。

今回の勉強会は元々は麻衣、亜衣が天神学園内で行った講義がきっかけになっている。幻舟亡き後、鬼獣淫界の侵攻によって傷ついた結界の修復作業に追われ、姉妹は部活に力を注ぐことができなくなった。それに対しての部員達へのせめてもの詫わび、今までの学園への感謝の気持ちもあつて、弓やなぎなたに留まらない、武芸全般についての勉強会を行ったのだ。

秘伝を惜しみなく披露し、実戦に裏付けされた姉妹の説明は、部員たちに大変好評を博した。その噂うわさをどこから聞きつけたのか、他校からも引き合いがあり、内容を再編して勉強会を開催したのだった。

鬼獣淫界の企ては失敗に終わった。しばらくは平和な日々が続くだろう。しかしいつの日か再び復活する。そのときは人々の武道の力、そして強い心が鬼獣淫界の淫らの誘惑を断ち切る源となるのだ。それゆえにライバルに当たる近隣校に対しても、熱意を持

って説明にあたった。

今日の学校で五校目になる。美人双子姉妹の巫女としての知名度に加え、武器を使わない護身術や体捌きたいさば、重心移動などの妙技が興味を買ったのか、得物をつかわない柔道部、空手部、などだけでなく、サッカー部やラグビー部など体の接触の多いスポーツ系まで多くの参加者が集まった。

生徒たちは皆、熱心にノートを取り、麻衣の一挙手一投足を見逃すまいと、真剣にその動きを注視した。顧問の先生達も流石さすがは幻舟様のお弟子さんだと、うんうんと何度も頷うなずきながら少女の知識と技に感嘆する。

活発な質疑応答の後、勉強会が終了すると生徒たちに取り囲まれていた。まるでアイドルを取り囲むファンのようだった。姉妹に人の輪が出来るのは学園でも見慣れているが、他校に行ってもこれほどとは。

強く、優しく、美しく、なぎなたを構えた姿は凜りんとして、それを振るうときは舞のように華麗で、武術への造詣が深く、それでいて奢おごったところは全くない。老若男女を問わず誰からも好かれ、いるだけで場が明るくなる……。

麻衣の長所を挙げればきりが無い。彩奈は先輩の偉大さを改めて知り、自分にはないものを幾つも持っている麻衣をますます好きになった。

夏休みの間だけでも、麻衣へ告白した女子は少なくとも十人はいると噂されている。彩奈も一週間前に級友の告白に同行したばかりだ。他の女子生徒と同様に断られはしたが、隣で聞いているだけでもドキドキが止まらなかった。このまま麻衣を好きになつたら、自分もいずれ告白してしまうのだろうか。相手にされるわけがない。そう思いつつも、あらぬ妄想に彩奈は顔を赤らめる。

勉強会を終え、帰宅途上の彼女たちは随分と沢山の荷物を持っている。武具は訪問先の学校から借り、行きの荷物は稽古着や着替えなどだけだったが、今は大量のファンレターやプレゼントを抱えていた。

「電車が大幅に遅れており、大変ご迷惑をお掛けしております。お待ちせ致しました。間もなく列車が到着致します」

駅の構内放送が流れる。ようやく列車が来るようだ。だが先頭で並ぶ彼女たちの後ろには長蛇の列ができていた。

「混みそうですね、先輩」

「乗れるのかしら」

嫌な予感的中する。普段は通勤時でも空いている路線だが、到着した車内は既に乗

客で一杯のようだ。

列車が停車しドアが開く。ふたりはアイコンタクトで会話する。

(次の電車にしますか?)

(そうする? でも次の電車がいつ到着するか……)

その決断が終わるまで後ろの人々は待つてはくれなかった。降りる乗客がいなとみるや、堰^{せき}を切ったようにふたりを押し、乗り込んできたのだ。

「キヤアッ!」

後ろから押され、ふたりは悲鳴とともに乗り込む。

その時だった。

(えっ?)

麻衣は後ろの男の大きな手の平をプリーツスカートの上に感じた。男はそのまま体を押し込んでくる。麻衣は手を避けようとするが人の流れの圧力は強く、お尻を押されたまま車内へと流されていく。

「センパイ」

彩奈の声が聞こえる。彩奈は車内の別の方向に押し流されてしまい、離れ離れになってしまった。麻衣の正面には女性がいた。乗車しようとする背後の人々の勢いで、麻衣

はその女性に向かい合わせにぶつかってしまふ。荷物がぶつからないように両手を広げたため、抱きしめるような格好になった。

「すいません」

麻衣は謝罪するが人の流れは止まらない。ふたりは更に密着していく。女性はこんな田舎町には珍しいぐらいビシッと決めたスーツ姿だった。白いブラウスに黒のタイトスカートのベーシックな服装ながら、モデルみたいに見事に着こなしている。かなりの美人だ。ショートヘアにこざっぱりと髪をまとめ、目鼻立ちのしつかりとした理知的な顔で、デキる女を予感させる。年の頃は二十代前半だろうか。ほっそりとしたスレンダーな体つきだが、密着して感じる胸元はとても豊かだ。女であれば誰でも憧れるであろう理想的な体型をしていた。麻衣より五センチ、いやそれ以上に背が高く、麻衣は胸元に顔をうずめるような状態になっている。

「凄い混み方ね。大丈夫？」

女性が声を掛けてくる。こんな田舎では珍しい満員電車にも落ち着いた様子で、麻衣を受け止めてくれていた。

「ええ大丈夫です」

麻衣は応じるがあまり大丈夫とは言えない。足の踏み場がなく右足がつま先立ちにな

つて、左足だけで体を支えている。床の隙間を探しかかとを降ろせるところはないか探ったが、どこも乗客足で埋め尽くされていた。右手の荷物も左手の荷物も奥へと流され、腕が前へ習えの体制になってしまう。どちらも離すわけにはいかなかった。片方には汗で汚れた下着が、もう片方には心の籠もったプレゼントと手紙が入っているのだ。

荷物は人と人との間に挟まり浮いた状態で重みは感じないが、引き戻そうと腕に力を込めても全く動かない。

そして乗り込んだ時に感じた男の両手は相変わらず麻衣の臀部にあつた。痴漢だろうか？ 男の手の平は今のところ動く様子はなさそうだ。男の手を跳ね除けようにも両手がこの状態ではどうにもならなかった。男の手がいかかわしい行為に及ぶなら直ちに誅伐するところだが、今は男の様子をみるしかないだろう。

男の背丈は麻衣と同じくらいで、首筋に生暖かい男の息遣いが感じられる。男の分厚い胸板が背中に密着している。男性としては背は高くないが、かなりの筋肉質だ。肩幅は麻衣の倍程もある。

混雑しているためか、乗り込むのに手間取っている。駅員の声が聞こえる。

「次の電車も大変遅れており、到着の見込みが立っておりません。出来る限り詰め合せて頂き、少しでも多くのお客様がこの電車に乗っていただけますよう、ご協力のほどお

願ひ致します」

(ええー、まだ乗るの。潰れちゃうよ)

一旦は流れの止まった人の圧力が再び高まる。お尻に感じる男の手の平も、より強く
圧着していく。

「これはキツイわね」

女性が話しかけてくる。

「ねえ、あなた麻衣ちゃんでしょ？」

「はい、そうですけど……」

「私は奈央。私も天神学園だったんだ。私もなぎなたをやってたんだよ」

「えっ、そうだったんですか、じゃあ先輩ですね」

「麻衣ちゃん、この辺じゃ有名人だもんね。実は練習にも見学しに行ったことあるんだよ。あなたとっても強くて格好良かったわ」

密着している奈央の胸元からはほんのりと香水の香りが漂う。蒸し暑く、汗と体臭で
むせ返るような匂いが充満した車内では、麻衣にとつては救いに感じられた。逆に麻衣
は自分の匂いが気になった。勉強会の後、訪問先の学校でシャワーを借りて汗を流した。
制汗剤を入念にスプレーしているが、それでもこの暑さでは新たな汗が滲み出してしまう。

奈央に幻滅されてしまわないかと不安になった。

背後でドアが閉まる音がした。乗車に手間取っていたがようやく発車するようだ。

電車が動き出した。

速度をあげようとするが、スピードが上がり切らないうちに電車は速度を緩めてしまう。何度もそれを繰り返した。頻繁な加減速により車内は揺れた。どのような走行指示が出ているのか分からないが、ひどく不安定だ。

抜群のバランス感覚を持つ麻衣も、片足立ちのこの姿勢ではどうにもならない。電車が揺れるたびに体がグラついてしまう。鍛錬も兼ねて徒歩通学の麻衣は電車に乗り慣れてないこともあつて、体を静止することが出来ないうえに。

体が揺れるたびに男の手に重心がかかり、麻衣の柔らかなヒップが男の手の平に沈み込む。進行方向に揺れれば男の右手に、逆方向に揺れれば左手に、左右の手のなかで揺れ動く。

「お嬢ちゃん、寄りかかっているよ。支えてあげるからね」

それは後ろの男の声だった。麻衣だけに聞こえるような小さな声、しかしはつきりと聞き取れた。密着している状態なので、男が声を発すると首筋に息がかかる。それがとても不快だった。

麻衣としては男の申し出を断りたかったが、体をひねることさえできぬこの体制では男に任せる他なかった。麻衣のほうからお尻を男の手の平にぶつけているだけに、抗議もしにくい状況でもある。ふらふらしている麻衣も悪いのだ。

(何も手の平で支えなくてもいいのに……。壁に寄りかかっているとさえ思えばいいのよ、おしりに何か触れていたからって、なんてことないじゃない)

麻衣は男の手の平を気にしないことにした。もちろん怪しい仕草があれば、即座に痴漢として引つ捕らえるつもりだった。

不安定な体制でゆらゆらと揺れる麻衣の体とは違い、男の体はびくりともしない。大地に根を張った大木のごとく微動だにせず、麻衣の体を、お尻を支えていた。

今のところ男の手の動きに怪しい気配はない。むしろ前方の奈央の方が問題なのかもしれない。奈央とはこれ以上なくらいに密着してしまっている。麻衣も後ろの男から逃れるべく奈央へ体を寄せていたし、奈央も同じ気持ちなのだろう。周囲の男に体を預けるぐらいなら、麻衣の方へと体を近づけるのは自然なことだ。だが奈央の体は同性の麻衣からみても魅力的だった。

タイトスカートからスラリと伸びた長い足、きゅつとくびれた腰、細い体にアンバランスなまでに豊かな胸、グラビアから飛び出したようなメリハリのあるボディが、目で

見ずとも分かるぐらいに体と体が触れ合っている。互いの胸がくつつき、その感触はなんととも言えず柔らかだった。

背の低い麻衣の胸が奈央の胸の下に潜り込み、彼女のバストを持ち上げ、胸の膨らみを一層強調していた。視線を少し下にずらすと、ブラウスの隙間から悩ましい深い谷間が視界に入る。顔を上げてシルバーのアクセサリーが光る首筋は美しく、赤いルージユをさした唇がセクシーだった。そしてそれらは僅か数センチ目の前の距離にあるのだ。女性同士とはいえ、目のやり場に困る光景だった。

奈央はキリツとした美人の外見に似合わずよく喋る。しゃべ

「麻衣ちゃんと亜衣ちゃんのこととは後輩からよく聞いてたんだ。私が卒業した後ですつごい可愛くて強い子が入ったっていうんでさ。思わず写真送らせたらこれがチョー可愛くてビックリ。それが双子でしかも巫女さんなんだもんね。いやあ、留年してでも麻衣ちゃん達と一緒に学園生活を送りたかったわ」

麻衣に合わせているのか、割と子供っぽい喋り方だ。

「あつ、そうだ、こんどの人気投票では麻衣ちゃんに入れるね。卒業生にまで投票権があるとはありがたいわ」

「え、なんですかそれ？」

「しまった！ 麻衣ちゃんには言っちゃいけないかったんだ。いやあ、なんでもない、こっちの話」

以前に姉妹の人気投票が行われたことは麻衣も把握していた。勝手に他人をアイドルの如く祭り上げて、グッズまで販売し始めてはやり過ぎだ。亜衣から首謀者の生徒達に、今後は辞めるようにと嚴重に注意をした筈だったが……。やはり密かに続けられていたのか。

奈央との会話の間に、徐々に背後の男の手が変化していた。麻衣のお尻を追いかけるように男の指先が動き出していた。さらにおしりを掴むような動き、いや、はつきりと男に尻を掴まれていた。左右の尻を交互に、それはもはや車両の揺れとは無関係に尻の膨らみを握り締められていた。さながらハンバーグでも作っているように左右の掌中でリズムカルにお尻がキャッチボールされていた。

「お嬢ちゃん、あの麻衣ちゃんだったのか」

会話を盗み聞きしていた男が、麻衣だけに聞こえるように話しかける。

「俺はマッサージ師をやったんだ。あんたの体も診てやろうか。なに、タダでいいよ、あそこの巫女さんには世話になってるからな。よく鍛えてはいるみたいだが、ほら、大

腿筋に張りがあるぞ」

大腿筋などと言うが、男が触ってるのはお尻だ。

麻衣は拒絶するように、不自由な体を左右に振る。だが男はそんなことはお構いなしにお尻全体を撫なで回してくる。

(どうしよう。なんとか止めさせないと。まだ着かないのかしら)

一向にスピードの上がらない電車の速度では、次の駅まであと二十分、いやそれ以上に掛かりそうだった。

奈央との会話は学校の先生の話へと移っている。

「数学の赤メガネってあだ名の、なんか目つきがやらしい先生まだいる？ あいつ一時期、他校の生徒に手を出したんじゃないかって噂になってさ、結局何のお咎とがめもなかったんだけど」

会話の間も男の手の動きが気になって仕方ない。片手で尻を揉みしだきつつ、プリーツスカートの上から太ももを触られていた。その内側にしなやかな弾力のある筋肉を適度な脂肪と柔肌で隠した太もも。その太ももを男の手が上下に動いては緊張で張りつめた筋肉を揉みほぐしている。

男の手は巧みであった。うなじに熱い吐息を吹きかけては麻衣の注意を上半身に逸そら

す。麻衣が息を吐き力が抜けた瞬間を見計らい、太ももをムニユムニユと揉んでいく。筋肉の繊維が解きほぐされ力が入らなくなっていく。硬さが取れ、プリプリの弾力だけを残し、上質の肉が食べ頃へと変化していった。

(はっ！)

麻衣は男の指先の感触に身を固くした。男の手が直接太ももに触れたのだ。校則の厳しい古風な校風の天神学園の制服は、夏とはいえスカート丈は短いものではない。だが素肌を晒^{さら}していない筈の太ももが直接接触られている。男は尻を撫で回す手で、少しずつ、少しずつ、スカートを手繰り上げていたのだ。太ももを触る手はその柔らかかですすべとした美肌に、芋虫のように五本の指を這わせつつ上へと上がっていった。表側、外側、裏側と満遍なく、ムツチリとした感触を味わいながら上昇し、脚の付け根へと移動する。そこには下着に包まれたお尻があった。

汗で汚れたスポーツ用の下着は訪問先の学校で着替えている。今履いているのはライトブルーの上下お揃^{そろ}いの下着だった。女子にも人気の麻衣は、些^{ささい}細なことでも注目を集めてしまう。着替えの時は特にそうだった。遠慮無くジロジロとみる同性の視線が気になり、下着には自然と気を使うようになった。今日の下着は麻衣が持っている中もお気に入りの一つだ。透明感のあるライトブルーは涼しげな色合いで夏に合う。白い花柄

の刺^し繡^{ゆう}が清^{せい}楚^そな印象を演出していた。

そのパンティの形を確かめるように男は手のひらを滑らす。下着の稜^{りょう}線^{せん}を辿^{たど}り、腰のパンティの一番細い部分とを何度も行き来する。素肌とパンティの素材の触り心地を調べあげ、その滑らかさ、柔らかさの違いを愉しむ。そしてもう片方の手もいつの間にかスカートの中へと移動していた。スカートをクイッと持ち上げている麻衣のヒップを握り締め、美少女の十分な成熟度合いを確認している。

「さつきからお尻を振って誘ってたもんなあ。ここを念入りにマッサージして欲しいんだろう。骨盤は女の命だからな」

男は恥知らずにも未^{いま}だにマッサージなどと強弁している。

（やっぱりこの男は痴漢だったのね。捕まえて次の駅で駅員さんに突き出してやるんだから！）

声を出して拒否することはしない。武道家としての血が騒ぐのだろうか、どうしても自分の手で女性の敵を捕まえたいという衝動に駆られているようだ。しかし、身動きの出来無い今の状態では為す術もない。

普段であればとつくに次の駅に着いている頃だが、電車は止まったり動いたりで全く到着する気配はなかった。ならばと隙間を作り片腕だけでも自由にならないかと体をく

ねらせていると、奈央から声が掛かった。

「麻衣ちゃん、あんまり動かないでくれるかな。ごめんね。ちよつと胸のあたりがこそばゆくて……」

麻衣の横髪が奈央のブラウスの隙間に入り込み、ブラからはみ出したバスタの表面を絶妙なタッチで撫でていた。

「あつ、わたしこそごめんなさい。気が付かなくて」

「いいんだよ。そんなに恐縮しなくても。麻衣ちゃんの髪の毛とっても柔らかでさ、なんか変な気分になっちゃいそうなんだもん」

奈央は麻衣の耳元に近づけるとさらに言葉を付け加える。

「麻衣ちゃんのおっぱいはもつと柔らかかだけどね」

こうなると下手に動くこともできなくなる。そんな麻衣の状況を横目に男の手の動きは、到底マッサージとはかけ離れた淫靡いんぴなものになっていった。

尻たぶを相変わずしつこく揉みしだかれています。お尻の割れ目へと押しやるように少しずつ下着がずらされ、半分以上剥むき出しになっていました。水行で磨き上げられたすべてのお尻を直接揉まれている。もう片方の手は太ももからお尻、腰までも撫で回していた。指先が肌に触れるかどうかぎりぎりのところをスー、スーつと掃くように麻衣の

素肌をなぞる。

(痴漢ってこんなにもしつこいものなの?)

麻衣は痴漢に会うのは初めてだった。クラスメイトから痴漢の話は聞いたことがあるが、すれ違い様にさつとお尻や胸にタッチされたというものがほとんどだった。鬼磨のセクハラ攻撃を受けている身としては、その程度のものであればと高をくくっていた。だが、背後の男の手はあまりにも執拗しつようでいやらしかった。

(絶対に許さないんだから)

改めて男への決意を胸にする。しかし、柔肌をなぞる手の動きが妙に気になる。男の指先の軌跡が後に残るのだ。そして男の手が再び同じ軌跡を描くとむず痒がゆいところを触られたようなそんな感触を覚えてしまう。揉みしだかれる尻たぶは手の平の汗によって肌と肌とが吸い付いていた。その一体感からなのか、なにやら熱を帯びていた。揉まれるうちにその熱は高まっていくようだった。

(どうして?)

僅かではあったが、麻衣は男の指技に自分が反応してしまっていることを自覚し動揺する。前方の奈央の柔らかなで豊満な体と、男のゴツゴツした硬い体、その異なる性質のサンドイッチが麻衣を狂わせているのだろうか。

進級してからバストやお尻のサイズが成長していた。特にお尻は大きくなった気がする。普通の女子であれば喜ぶのだろうが、麻衣は平和ボケして鍛錬を怠ったためなのだろうか、甘いものを食べ過ぎたのだろうか、と悩んでいたのだ。

言葉には出さないが亜衣も最近しきりに、風呂上がりに鏡を気にするようになったところを見ると姉も同様のようだ。少女から大人の女へと脱皮していく、女性としての自然な体型の変化なのだろう。その一番気になる体のパーツであるお尻を、今は男の手が好きないようにいじくり回している。男の大きな手はサイズの上がったことなど諸共せず、魅力を増した桃尻を丸ごと五本指で握りしめていた。

(動けない女の子にこんな事するなんて、なんて卑怯ひきようなの)

男への怒りで気持ちを入れ替える。麻衣とてこのまま男の好きなようにさせるつもりは毛頭ない。つま先立ちだった麻衣の右足はどうか地にかけていた。そしてその足で男の足を探る。

(そこよっ！)

麻衣は男の足の小指あたりを目掛けて踏みつける。体制が十分ではなく踏み込みが浅いが、その急所ならば大の大男でも効く筈だ。

「いてえっ」

車内に男の絶叫が響き渡り、他の乗客が何事かと辺りを見回す。だがその声の主は麻衣が期待した背後からではなく、麻衣の後方や斜めからだった。

「俺が何したって言うんだ」

踏みつけられたとおぼしき男が声を荒らげる。

（そんな、背後とは言え、この距離で間違えるわけがない）

そうは思っても平謝りするしかない。

「すみませんでした。体が揺れてしまつて」

「チツ」

男は舌打ちを鳴らし明らかに不服そうだが、意外にもそれ以上は文句は言わなかった。

「駄目じゃないか、暴れちや。大人しくしてなさい」

背後の男からの言葉だった。麻衣のストレートボブの髪の毛に顔を突っ込み、うなじをペロリと舐められた。そのおぞましさに背筋に鳥肌が立った。

「お仕置きだ。スペシャルマッサージをしてやろう。入念に揉んでやるからな」

男の指が太股の付け根へ、さらに足と足の内側へと指を進める。そこは少女の最も神聖なる地だ。麻衣は足を閉じて阻止しようとするが既に手遅れだ。むしろ柔らかな両方の太ももで手首を包み込み、男を喜ばしてしまう。

男は事を急がない。スカートの中で最も熱がこもる太ももの内側は汗で濡れていた。指先を円状に動かし汗を広げていく。左右交互に円運動を行うと、閉じ合わされた太ももに、小指を上にして手刀を作り挿しこんだ。汗を潤滑油代わりにスルスルと滑らし、出入りさせる。肉の充実した内ももを擦りながら、小指を太ももの付け根にかすめさせ刺激を与える。繰り返し動かし、その摩擦を強くしていくと、閉じ合わせた太ももの圧力が次第に緩んでいった。

挿しこんだ手の平を反転し、反対側の内ももを擦り上げる。今度は人差し指を先程よりも際どくパンティの底地に当てていく。敏感な内ももに卑猥なマッサージをされ、麻衣の両足は程よく開いてしまう。

「ちよつと刺激が強いが我慢するんだぞ。ホルモンバランスがよくなって、美容にもいいんだ」

男はいよいよ手の平を表に返し、麻衣の中心地に指を這わせた。彼女のそこはこんもりと膨らんでいた。恥丘をねちねちと弄り触感を満喫すると、ゆつくりと聖裂をなぞるように前後に指を動かす。

(やだ、そんなところまで……、今度こそ)

再び男の足を探り、今度こそ相手を間違わぬように踏みつけようとしていると、隣か

ら腕を握られた。先ほど足を踏まれ叫び声を上げた男だった。さっきのワビを払え、とでも言うつもりなのだろうか。男はつり革広告を眺める素振りをしてながら、麻衣へと腕を伸ばし、半袖の制服から露出した二の腕から腕の甲まで、若々しい美少女の汗ばんだ皮膚の感触を愉しむのだった。

その間も背後の男は熱心に麻衣の股間に指を這わせている。繰り返し指を動かすと、下着越しにも麻衣の割れ目が浮かび上がってくる。

最早^{もはや}一刻の猶予もならない。何とかせねばと思案していた矢先だった。

「麻衣ちゃん……」

奈央からであった。その言葉には官能の響きが含まれていたが、男達から受ける恥辱に注意が向かってしまっている麻衣はそのことに気が付かなかった。

先ほどのように痴漢の魔の手から逃れるため体が揺れ、奈央の乳房を刺激してしまつたのだろう。

「奈央さん、ごめんなさい」

麻衣は謝る。だが奈央の顔が近づいてくる。瞳を潤ませた表情は大人の色気に満ちていた。まさかと思つた時には唇を重ねられていた。思いがけない奈央の行動に麻衣は固

まっていた。時間が止まったかのような、そんな感覚だった。同性との禁断のキス。奈央の唇はあまりにも柔らかかで心地よかった。一瞬、男達に痴漢行為を受けてることを忘れさせるほどに。

奈央の唇が離れる。

「麻衣ちゃんがいけないんだよ。こんなに可愛いから」

奈央がまた優しく口付けする。

「チュツ」

ぷるんとした桜色の下唇を優しく吸われた。再び奈央の顔が離れる。

「もう一回」

「ダメっ」と言う声が出る前に口が塞がれた。三回目のキス。言葉を発するためには開いた麻衣の口に奈央の舌がスツと潜り込む。舌と舌が触れ合った。唇と同じく柔らかかで滑らかな奈央の舌……。

ここが電車内であることを思い出し、他の乗客にも見られてしまうとの恐れが頭をよぎるが、麻衣は奈央の唇を拒むことができなかつた。むしろ車内での禁断の行為に顔が熱くなり、体温が上がるのが自覚できてしまう。

痴漢から少しでも避けるためではあったが、学園のアイドル的存在の美少女に肢体を

すり寄せられれば同性といえども落ち着いてはいられないだろう。仕掛けてきたのは麻衣からなのだとばかりに、奈央は遠慮なくスリスリと体を擦り合わせてくる。

背後の男の指先の刺激が強くなる。男が麻衣と奈央の行為に気がついたのだろう。下着の上から指を強く押し当て麻衣の形を探る。割れ目の長さ、プニプニとした花びらの柔らかさ、性器の形状を丹念に調べていく。男の指先がピタリと止まる。そこは麻衣の入り口だった。秘めたる入り口に、指先をぐりぐりと回転させ押しこむ。下着越しとはいえ、強い刺激に麻衣は「うっ」と小さく呻くうめのだった。

少女の反応が自分のキスによるものと考えたのか、奈央はより深いキスを仕掛けてくる。奈央の舌が麻衣の口中を探るように動き、どうしていいのか分からないといった様子の子の麻衣の舌に絡ませる。

奈央の唇がようやく離れようとしたそのときだった。背後の男から声が掛かる。

「まだだ。まだやめるな」

麻衣と奈央の動きが凍り付く。

「おふたりさん、もっと続けるんだ。そうすりゃ他のやつらにはバラさないでおいでやる。こんなこと会社や学校に知られたら大変だろう」

一瞬の躊躇ちゆうちよがあったが奈央の舌が動き出す。そして麻衣も奈央を受け入れる。

「そうだ、それでいい。それにしてもあの麻衣ちゃんが電車の中でこんなエロいことをするとはなあ」

自分の行為を棚に上げて、レズキスに耽^{ふけ}る少女をなじる。男の手がスカートの中で前へと移る。なだらかな曲線を描く下腹部を撫でさすると、その手がスツと下へと移動し、パンティの中へと潜り込む。淡い草むらを抜け男の指は底部へと達する。秘裂が直接弄^{いじ}られる。下着の上からとは違う強い刺激に少女は慄^{おの}く。

(このままじゃ、本当にまずい……)

奈央の動きもより大胆になっていた。ディープキスを仕掛けながら、セーラ服の裾から、手を入れてきた。麻衣の乳房を下から持ち上げ、自分の乳房に押し付ける。上からは奈央の乳房で、下からは手で、麻衣の乳房を挟み込み優しくプレスするのだ。

ブラの上から麻衣の乳首を正確に探り当てられた。乳首に爪を立てられカリカリと擦り、乳房の中に埋め込むように乳首を押し潰す。痛みを感じるぎりぎり解放し、再び爪で擦られた。麻衣の乳首は素直に反応してしまい膨らんでしまう。勃起した乳首はより感度を増し、ピリピリとした刺激を頭に伝えてくる。

麻衣の呼吸が荒くなる。苦しげに泳ぐ麻衣の舌を捕らえ、チューと吸い上げる。その味はよほど甘美なのだろう。奈央はうっとりとして表情を緩める。さらに舌を吸い上げると

根元まで唇でしごき出す。

「清纯そうな顔をして、随分とエッチなんだな。お前のおまんこ、すつごく熱くなってるぞ。おまけに濡らしてるじゃないか」

背後の男が汗で光る首筋を舐めまわし、耳に息を吹きかけながら麻衣をからかう。美少女は汗までも美味なのか、しつこく舐め回され、首元が唾液で濡れていた。真つ赤になった耳へと舌を伸ばし、耳の裏側を舐めながら耳たぶを甘噛みされた。

下着の中では男の指先はピタリと閉ざされていた扉をこじ開け、敏感な粘膜をいたずらしていた。肉芽を掘り起こし、浅瀬を指で探り暴こうとする。もう片方の手では尻たぶが相変わらずモミモミと揉まれている。尻たぶが熱い。その熱が男の手の平からもたらされているのか、麻衣自身のものなのかわからないが、熱は尻全体に広がっていた。

散々に麻衣をいたぶると、秘所をまさぐる男の手がまた後ろへと移動した。パンティの底地をずらすと、素早く入り口を捉え、中指を突き刺す。

「ううっ……」

麻衣は苦しげに呻く。異物が侵入する不快感と痛みがある。何度もズブリ、ズブリと抜き差しすると、今度は指の代わりに硬く熱く大きなものが押し付けられた。いつの間にもズボンから取り出したのか、それは抜き身だった。

(嘘でしょう……、こんな電車の中で……、満員なのに)

麻衣はこれから男の行おうとしている暴虐に気がつき、それだけは許してならないとどうにか逃れよう試みるが、腰が万力で挟まれたかようにがちりと掴つかまれ、ピクリとも動くことができなかつた。

「エツチな麻衣ちゃんを治療してやろう。この棒が効くんだよ。体がスッキリするからな。少々病みつきになるのが困り者だけだな」

「うぐっ」

体に激痛が走る。男の熱くたぎる怒張の先端が麻衣の入り口を捕らえ、侵入を開始したのだ。その瞬間をじつくりと味わうように、その動きはスローだ。だが止まることはない。ぐりぐりと少しずつ確実に内部をこじ開け繋つながっていく。

「へへへ、処女みたいにきつきつじゃねえか。いい穴しやがって」

公共の場でしかも大衆の面前で、こんな行為に及ぶ男が信じられなかつた。だがこれから知る事実からすれば、このことすら些細ささいな出来事に過ぎなかつた。

力づくで秘肉を切り開き、とうとう男の怒張が最奥にまで到達する。そして麻衣はやつと気付く。男の魔羅から発する異様な熱を。

その熱はこの世のものではなかった。それは淫鬼が女を狂わさんと発する淫らの熱であつた。

あり得ない……。

人型に変化出来る程の力を持った鬼が生き残っているとは……。

一年近くも前のこと、鬼夜叉童子を討ち取り鬼獣淫界の野望は潰えた。その際に力を持った鬼程、深く地中に封印された。残った残党共も各地の退魔師、高僧の助力により余さず滅ぼした。ここ最近では邪鬼すら見かけなくなっていた。それなのに……

人型に変化できるのは一部の幹部クラスの鬼だけだ。仮に人間に変化できたとしても、女を見れば発情する淫鬼が痴漢行為に及べば立ちどころに劣情し、その醜悪な正体を現すだろう。このような凌辱りようじよくを受ける前に、立ち込める淫らの匂いに気がつく筈だ。

人間界に隠れ潜むうちにそのような能力を身に着けたのか。理由はどうかあれ、不覚を取り、犯されているのは紛れも無い事実だつた。

「貴様、一体何者？」

奈央に聞かれてしまうことも厭いとわずに男に問う。

「今頃気がついたか、痴しれ者め。わしのことはまずは体で教えてやる。だが驚くのは早

いぞ」

含みをもった言い草を吐いて抽送が開始される。麻衣の体が下から斜め前方へと突き上げられる。まるで槍で串刺しにされているようだった。ゆつくりとだが力強く淫鬼が突き上げる。

三回目の抽送でようやく気がついた。

淫鬼が突き上げる度に奈央と乳房がぶつかりあう。それは麻衣の方からだけでなく、奈央の方からもぶつかってくるのだ。

奈央の後ろに男の気配が感じられる。

「まさか！ 奈央さん！」

「嘘でしょ！ 麻衣ちゃんもなの？」

乳房と乳房がまたぶつかりあう。男たちは調子を合わせて突き上げているようだ。

奈央もまた痴漢を受けていたのだろう。そして今は自分と同じく犯されている。自分のことで精一杯で、奈央の状況を気が付いてあげられなかった未熟さを恥じる。

奈央を犯しているのも淫鬼なのか、それとも淫鬼に操られた人間か。いずれにしても複数の敵に取り囲まれているのは確実なようだ。

「なかなかの趣向であろう。それにしても極上の体をしているではないか。平和にうつ

つを抜かし、男と睦合ってばかりいたのかと思いきや、あまり使い込んでいないようだのう。たつぷりとお前の体、味あわせて貰もらうぞ」

麻衣にはまだ彼氏はいなかった。男探しにかまけているほど暇ではないし、何より戦いを通じて自分たちに課せられた使命の重さを知った。その使命を多少でも理解してくれるパートナーが欲しかった。そうなると同世代の男子達では難しいだろう。

おぞましい鬼獣淫界の淫具で処女は奪われはしたが、男性経験ゼロの膣内を淫鬼が抜き差しする。

すでに最奥まで突かれているにも関わらず、侵入者を排除せんと押し返す感触が淫鬼にはたまらない。引き抜けば元のように通路が固く閉ざされ、乙女の秘密を暴く感触を何度も味わうことができた。

その興奮の高まりを表すように淫鬼の魔羅が引きぬかれ、そして突き入れられる度に魔羅から発せられる淫熱はより熱くなっていく。

この淫熱にこれ以上汚されてはいけない。このままでは取り返しのことになってしまふ。麻衣の頭に危険信号のシグナルが鳴るが、打開策は思い浮かばない。

腰を軽く掴むだけで麻衣の動きを完全に封じてしまう男の臂りよりよく力は相当なものだ。力だけではなく体術も相当な実力なのだろう。天神の力の加護を受けた麻衣は兎とも角かく、並

の人間では軽く叩たたかれただけでも重症は免れないだろう。麻衣が魔羅から逃れ反撃に転じて、逃げ場のない車内では多くの人が犠牲になってしまおうことが容易に想像できた。

淫鬼がやや角度を付けて突いてくる。牆壁の右側を突くように。

「見てみる」

右を見ろということらしい。犯されながら魔羅で指図をされるとは何たる恥辱か。魔羅の突く方に顔を向けると人垣に隙間が出来ていた。その先に自分と同じセーラ服を来た少女が見えた。

電車に乗り込む際に離れ離れになった彩奈だった。彩奈は顔をうつむき加減で何かに耐えるように口を閉ざしていた。背後には覆おほいかぶさるように密着する男の姿があった。

(そんな彩奈ちゃんまで……)

手の動きは見えずとも自分の受けたばかりの経験から、男が彩奈のお尻をいじっているのが分かる。男は耳元に口を近づけ何やら呟つぶやいている。卑猥ひわいなことを囁ささやかれているのだろう。

セーラ服の胸元の黄色いスカーフが不自然に揺れている。彩奈の側面に立った男が制

服の裾から手を潜り込ませ、乳房をいたずらしているのだ。

スカートの前方が奇妙にまるで風船でも入れているかのよう膨らんでいる。彩奈はそれを両手で懸命に押し返している。

人垣が揺れ、彩奈の脚が見えた。その太ももを男が握り締めている。手の位置から見て彩奈の前方に男が座り込み、スカートの中へ頭を突っ込んでいるようだった。スカートの中で彩奈がどのような辱めを受けているのかと思うと、麻衣の胸は張り裂けそうだった。

(彩奈ちゃんを早く助けなければ)

わずか数メートルの距離。手を伸ばせば届きそうな距離だ。

しかし、体を引き裂くような痛みと汚辱感が麻衣の置かれている現実を思い知らせる。淫鬼は麻衣の視線が彩奈に釘付けくぎつになっっている間も、せつせと腰を動かし新鮮な媚肉を擦り続けていた。彼女には太すぎる肉塊を力ずくで抽送され、湿りの足りない膣内が悲鳴を上げている。

首を舐め回しヌルヌルにしただけでは飽きたらず、セーラ服の襟から人間離れた長い舌を差し入れ、首の根元まで伸ばしていた。僧帽筋、さらには表に回って、鎖骨に至るまで舌を滑らせる。汚らしい唾液を垂らし、麻衣のブラジャーまでも汚していた。唾

液は意思があるかのように、ブラの中の乳房まで覆い、ベトベトに濡らしていく。

「見てみな、何か探しているようだぞ」

淫鬼の言うとおりに、彩奈が何かを探すように見渡していた。すぐに分かった。彩奈は麻衣を探しているのだ。

「いいのか？ 見られちゃうぞ。可愛い後輩にな」

彩奈の視線が麻衣の方へと近づいていた。無残に犯されている自分の姿が見られてしまふ……。視線が近づくとつれその不安が高まった。

あともう少し……。

心臓の鼓動が自分でも分かるほどに高まった。

その時、人垣の隙間が塞がり彩奈の姿が見えなくなった。麻衣はほつとすると同時に、そんな自分を責めた。

(あの娘は助けを求めていたのに、どうして自分は……)

動揺する麻衣につけ込み、淫鬼はズボツ、ズボツと攻め立てる。淫熱が次第に膣を侵食していく。

体が熱い。蒸し暑い車内とも相まって汗が流れ出る。そして知らず知らずのうちに膣内が蜜で潤っていく。

「お前達、また口づけを交わしてみろ」

奈央の唇が近づいてくる。

「奈央さん駄目。こんな奴の言いなりになつては」

だが奈央は止まらない。砂漠の中でオアシスを求める旅人のように、麻衣の口を追いかける。麻衣は顔を背け拒む。奈央のとろけるようなディープキスが怖かった。女同士の倒錯的なディープキスをされながら、凶悪な魔羅を拒絶し続けることがいつまで出来るのか怖かったのだ。

淫鬼がズンと一際深く打ち込んでくる。強烈な一撃で動きが止まったところを奈央の唇がついに麻衣を捕らえた。

続けてもう一撃。思わず口が開いた所を奈央の舌が侵入する。もう離さないとばかりに舌を掬^{から}め捕られる。

「ん……っ、むうっ……」

奈央の両手でできつく抱きしめられた。キスが深まると体からすうつと力が抜け、麻衣の頑^{かたく}々な抵抗が弱まっていく。力の抜けた指先から、スルつと手荷物が離れた。

麻衣の両手も何かにすがるように奈央を抱きしめた。抱きしめ合うと互いの背後の振動が、よりお互いに伝わるようになった。

奈央の振動も麻衣の振動も強くなつていく、最悪の予感が頭を頭を掠^{かす}める。内臓を持ち上げんばかりに深く突き刺し、男達の動きが止まる。

「うぐつ、うろう……」

麻衣と奈央は互いの唇を強く合わせ、声が車内に溢^{あふ}れるのを抑えた。ドクッ、ドクッ、ドクッ

淫鬼の体液が麻衣の中心部深くへと流し込まされる。

(電車内で……、こんな化け物に出されるなんて……)

淫鬼の精液は魔羅と同様にいやそれ以上に熱かった。熱さによりその存在感をありありと示す。子宮が汚され、そして逆流し膣内を流れ落ちるのが嫌でも理解されられた。

麻衣は絶句しながらも淫鬼の隙を探した。射精後の今こそが脱出のチャンスだ。体のバネのため、一気に男を引き剥^ひが^はがそうとする。

その瞬間、グイッと腰が強く掴まれ、骨に達するほどの痛みが走る。

「クククッ、無駄なことはやめておけ。今のはほんの挨拶がわりよ」

淫鬼の魔羅は精を放出したにも関わらず、硬直を保ったままだった。僅かばかりも萎えていない。

抽送が再開された。淫鬼が残酷に告げる。

「言った筈だ。たっぷりと味わわせてもらおうとな」

麻衣は知らない。

淫らの宴はまだ始まったばかりだということ。

第二章

電車はのろのろと進んでいた。

止まっているのか、動いているのか、分からぬほどの速度しかでていない。歩いたほうが速いぐらいだろう。

ふたりの女がドアに手を付き犯されていた。

麻衣と奈央である。後ろから突かれながら、車両の奥へ奥へと押し込まれ、乗ったのは反対側のドアへと移動させられた。

相変わらずの立ちバックだが、股間に伸ばした手で、敏感な肉の真珠を押し潰し、お尻を突き出させられていた。

窓の外では、沈みゆく夕日に照らされた田園風景が広がっている。のどかな車窓風景

とは裏腹に、一枚扉を隔てた車内では地獄図が続いていた。

「流されてはいけない、奈央さん」

隣で犯される奈央に麻衣が声を掛ける。

奈央はどうか麻衣に顔を向けるが応じる余裕はない。奈央は手の甲に口を押さえつけて声を必至に抑えている。しかしそれも限界を迎えつつあるようだ。時折惱ましい声が漏れ出ている。

「ウツ、ウウツ、アツ、アン……」

奈央を犯す男が唸り^{うな}声を上げる。奈央の腰が震えていた。男が奈央の体内にぶちまけているのが麻衣にも分かった。

男が満足気に出し終わると別の男が奈央に挑みかかる。これで三人目の男だった。麻衣達を無数の男達に取り囲み、周囲の乗客から壁をつくって隔離していた。

その男達に奈央は代わる代わる犯されていた。

「今度はお前の番だ」

淫鬼が宣告すると腰を掴み直し、ラストスパートへ入る。

抜き差しを繰り返すうちに、熱くなつていく淫鬼の魔羅は、焼け火箸でも入れられてい

るかの如きだった。そして最奥に達する度に、バーナーで炎でも噴き出しているかのよ
うな熱い淫気を浴びせてくる。

淫鬼のピッチが早まる。奈央と同じく麻衣も手の甲に口を押し当て、声を抑えていた。
「ウツ、ウツ、ウツ、ウグツ」

抽送の激しさに苦しそうな声が漏れてしまう。
そして淫鬼の剛直が爆発した。

(また、中に……)

最初に出された時と同様に熱いザーメンが麻衣の中に流し込まされた。

「まだまだ、こんなものでは済まさんぞ」

一滴残らず流し込みながら麻衣の耳元で無慈悲に囁く。やはり淫鬼の魔羅は萎えるこ
となく屹立したままだ。

淫鬼は麻衣の片足を持ち上げ体位を変える。一刻も抜くのが惜しいのか、挿入したま
ま結合部を中心にぐるりと回転させ、今度は正面から向き合う。

ドアに押し付けられ、深々と突き刺されながら体を密着すると、淫鬼の強烈な体臭が
鼻に付く。溜まりに溜まった恥垢の匂いがした。スカートの中から淫鬼の濃厚な精液の
匂いが漂ってくる。髪の毛も細胞の一つ一つまでも、淫鬼の性臭で染められてしまう気

がした。

淫鬼が顔を近づけてくる。麻衣は顔を背けるが頭を掴まれ、無理やり唇が重ねられた。さらに淫鬼は口内を味わおうと舌を伸ばす。しかし、麻衣は歯を食いしばり、それ以上の侵入を阻止した。

「ほう、流石は天津の娘、実に生きが良い」

淫鬼はむしろ喜びを露わにする。そしてほつぺたも、唇も、鼻の頭に至るまでペロペロと舐め尽くす。美しい顔が唾液でべたべたに汚された。

淫鬼の抽送が再開される。淫鬼は汚辱に歪む麻衣の顔を満足気に見つめながら、怒張を打ち込んでいく。

麻衣と奈央を取り囲み犯す男達の輪に見知った少女が連れ込まれた。彩奈である。彼女もドアの前へと追いやられ、麻衣を中心に三人の女が並べられた。男達が彩奈に群がる。

「彩奈ちゃん……」

「先輩……」

男達は麻衣に見せつけるように彼女をいたぶる。セーラ服の裾を持ち上げると彩奈の瑞々しい乳房が露呈する。すでにブラジャーは剥ぎ取られていたようだ。正面に立った

男の両手が、その若さあふれる乳房を揉み始めた。

下方ではスカートの中に男が入り込み、太ももや股間を舐めまわす。横に立った男が彩奈の唇を無理矢理に奪っている。

「彼女には手を出さないで」

「知らんなあ。人間の欲のなんと業の深きことよ」

淫鬼は素知らぬふりで麻衣を犯す。

可愛い後輩が嬲り者にされているのが辛いのだろう。これまで以上に麻衣の顔が苦悶で歪む。淫鬼はそれを見えますます笑みを浮かべるのだった。

おもむろに淫鬼は麻衣の膝の下に手を入れ持ち上げた。両足とも持ちあげられ、麻衣の体が宙へ浮かぶ。背中ではドアに支えられ、変形の駅弁スタイルへと移行する。

麻衣の体がバウンドする。力強い突きで体を浮かび上がらせては、麻衣自身の重みを利用して深々と突き刺す。

麻衣の膝には、力づくで破かれたライトブルーのパンティが絡み付いていた。淫鬼に下から突かれる度にひらひらと舞う。

「見てみる」

麻衣に対しての言葉ではない。彩奈に対して命じたのだ。唇を舐め回していた傍らの

男が彩奈の頭を押さえつけ、麻衣の股間へと顔を向けさせる。

太ももが持ち上げられたことよってスカートがめくれ上がっている。淫鬼が突く度に、辛うじて股間を覆っているスカートの裾が浮かび上がり、麻衣の茂みと淫鬼の茂みがぶつかり合っている姿が見え隠れする。

麻衣と己が繋がっている確たる証拠を、彩奈に見せつけるのだった。

(こんな格好を……彩奈ちゃんに見られるなんて)

ぐぐつと肉塊を深く杭打ちをする。持ち上げられた両膝もドアに押し付けられ、麻衣のその姿は標本にされた蝶のようだった。

極太の肉杭で体を固定して、淫鬼が再び唇を奪いに掛かる。唇を無理やり重ね、深突きをしながら、淫鬼の舌が麻衣の口をこじ開けようとする。先刻のように歯を食いしばって麻衣は耐えようとするが、前歯に受ける舌の力は、顎が外れそうな凄まじい圧力だった。

僅かな隙間が空いてしまうと一気に侵入された。奈央とは全く異なる、甘さの欠片もないデイープキスだった。分厚くざらついた淫鬼の舌で顎も歯茎も舐め回され、呼吸ができないほど奥にまで、淫鬼の長く太い舌が入り込んでくる。

口の中が犯されていた。十五センチ以上はあるかという、棒状に尖らせた淫鬼の舌

が、伸縮し麻衣の喉奥までねじ込まれていた。膾口も同じリズムで魔羅に抽送された。麻衣の上下の口が犯されていた。

散々にいたぶつてから、麻衣の口を解放すると、淫鬼がさらに体位を変える。麻衣の片足を降ろし、残った足の足首を掴み、天高く持ち上げる。体を横向きにさせ、足が百八十度開かされた。

麻衣の開脚した左右の足は、床から伸びた一本の棒状になった。麻衣の柔軟な体を利用した変質的な体位で、淫鬼はさらに突きまくる。膝に引つかかった麻衣のパンティを足首にずらすと、淫鬼の顔の前でたなびく。あたかも麻衣を征服した御旗であるかのように、水色の布きれが揺れるのだった。

彩奈の顔が結合部へと近づけさせられた。こんな格好ではスカートはめくり上がり、用をなさない。なだらかな曲線を描く下腹部までが露出している。

彩奈の眼前わずか数センチの距離で、淫鬼の黒光りする剛直が麻衣の性器に出入りしていた。

信じ難い光景に言葉を失った。尊敬して止まない自分に取つてのアイドル。痴漢達から自分を救出してくれるものと信じていた無敵の先輩。その麻衣が目の前で犯されてい

る。

彩奈は涙が止まらなかつた。そのショックは麻衣とて同様だ。あんなになつてくれた後輩にこのような惨めな姿を晒さらしているのだから。

麻衣の柔軟さを確かめるように淫鬼は激しく突いた。

一本の棒となつた足は竹のようになり、淫鬼の突きを受け止め弾はじき返してくる。麻衣の鍛えぬかれた体は、少々のことでは壊れはしまい。思う存分いたぶり犯すことができるだろう。積年の恨みを何倍にもして返すことができる。淫鬼は捕らえた獲物の価値に興奮を高めていく。

もはや周囲の目など気にする様子もなくぶち込んでいく。麻衣は激しく体を揺らされ、口を押さえることもできない。自分の呻うめき声が漏れ、股間では腰と腰がぶつかり、パンツという破裂音が鳴っている。

いかに男達を取り囲んでいるとはいえ、このままでは周囲の乗客、いや車内中全てに知られてしまうだろう。

隣では奈央がすっかりと官能にとろけた声を出していた。呆然ぼうぜんとした彩奈が男達に抵抗する様子もなくおもちやにされている。

痴漢、レズキス、淫鬼からの強姦^{ごうかん}、余りにも多くのことが起きすぎた。もう何も考えることができない。

がつしりと握り締められた足首が痛い。音を立てて腰と腰がぶつかり合い、股関節が裂けそうだ。内臓がかき回され、ズシンと体内で響く衝撃を手で支えきれず、ドアに何度も頭を打つてしまう。

全身がバラバラになりそうな痛みが走るのに、麻衣の中で別の感覚が占める割合が次第に高くなっていく。

膣内が入り口から最奥まで満遍なく熱い。淫熱が体に浸透し、その熱気はさらに体内へと拡散する。

体中が痛いのになぜか膣内の痛みだけが消えていく。魔羅の衝撃を受ける度に脊髄を通り抜け、頭に甘い電流が走る。

(これは一体何?)

麻衣は体内で広がる新しい感覚に戸惑うがそれ以上は考えることができなかつた。

「ウウツ、ウウツ、はあ、はあ、あつ? ああアア、アンツ、ウンツ、ああ……」

口を抑えることができず、声が溢れ^{あふ}出る。その声には奈央が出しているような女の声^たが混じっていた。淫鬼がピッチを落とす。けれども叩き込む力強さは変わらない。ズド

ンと大砲のような一撃を打ち込んで腰を止め、麻衣の中に衝撃を拡散させる。

「うぐつ……うぐつ……、こんなつ……強すぎつ……」

淫鬼が再びピッチを上げる。麻衣はあえなくその奔流に飲み込まれた。

「ヒイイツ、いやつ、いやつ、あああ、ああああアア……」

車内に響き渡るような声で麻衣が啼^なく。麻衣は今まで体験したことのない高みへと押し上げられた。

亀頭で子宮口を塞がれ淫鬼が三度目の射精をする。麻衣は目を閉じそれを受け止めた。熱いザーメンが子宮を満たす。一本の棒となった足がプルプルと震えている。

淫鬼の噴出が終わると、麻衣は少しずつ冷静さを取り戻す。背の高い男達に囲われているとはいえ、あれだけ大きな声をだしてしまつたら、車内中に何をされたのか知られてしまったのだろうか……。

衆人環視のなかで犯されたのだ。目を開けるのが怖かった。だが、周囲の乗客がざわつく様子はない。むしろ異様な静けさだった。

「結界を張つたのだ。音を遮断する結界をな」

淫鬼が種明かしをする。

「安心したか、ならばまた楽しもうではないか」

これだけの責め苦を与えながらまだまだ淫鬼は満足してないようだ。高く掲げられた足が降ろされる。しかし、地には着かせては貰^{もら}えない。腰の位置まで降ろすとピストン運動が再開される。

（今度はこんな格好で犯されるの？ もう嫌、もうたくさんよ！）

片足だけ上げたその姿は犬が小便をするような格好だ。最初の凌辱時と同じように淫鬼はゆつくりと味わうように抽送をする。

屈辱的な体位で犯されながらも、麻衣の体内には官能のうねりが感じられた。先ほどの暴虐のような全身の痛みはなく、あるのは甘い快樂への誘惑であった。

膣内が魔羅でこすられ、子宮口をズンズンと突かれると、衝撃とともに脳髓がしびれる。

「他の奴らには聞かれはせん。好きなだけ声を出していいからな」

淫鬼が言う前に麻衣は声を出していた。

「イヤッ、ああッ、あああ、ダメッ、ああん」

初めての感覚に戸惑いながらも、愛らしいよがり声を披露する。

（こんなんじや駄目。しっかりしないと、このままでは奈央さんも彩奈ちゃんも救うこ

とが出来なくなる)

だが体に広がる官能の炎は消すことが出来無い。これならば苦痛のがまじだった。いつそのこと、鋭利な刃物で足を刺したいときえ麻衣は思うのだった。

(ああ、お腹の中が熱い)

子宮の中のザーメンは未だに熱湯のような淫熱を放っている。揺れ動く体によってシエイクされ、子宮内全体が熱せられる。

狭い肉路は淫鬼の怒張によって拡張され、その太さに早くも柔軟に馴染み、しつとりと包み込んでいる。

麻衣の意思とは無関係にキュッキュツと陰茎を絞り上げ、淫鬼に快楽と勝利の喜びをもたらす。膣内はたっぷり潤んでいる。それは淫鬼が放った体液だけでなく、麻衣の蜜も混じり合いインサートをスムーズにする。

淫鬼は速度を変え、深さを変え、性感に目覚めたての麻衣にとって最適の具合を探る。彼女が語らずとも体がどうされると良いのか白状していた。

「あつ、あつあ、あん、嫌よ、いやつ、イヤン……」

拒絶の言葉は麻衣自身に対してのものだ。

「大分素直になってきたではないか」

「はあ、はあ、違う、そんなんじゃない。こんなの違うの……あんっ」

このままでは快樂の虜とりこへと堕ちてしまう。麻衣の脳裏を墮落の恐怖がよぎる。

「ああ、ああああ、イヤッ、嫌なのに……あんっ、はあっ、ああん」

「どうしたイクのか？ どうなんだ？ ほれ、言ってみろ、イクんだろう？ 観念してイクと言わぬか」

淫鬼が腰の回転を早め追い詰める。

「いやあああー、あああっー」

麻衣が悲鳴とも快樂の声ともつかぬ鳴き声を上げると、四度目の射精が始まった。麻衣の腰が、ピクリ、ピクリと痙攣けいれんする。膣内も同じようにひくつき、射精を促してしま

う。

「はあ、はあ……」

「すっかりと覚えたようではないか。お前の穴は最高にいい具合だぞ」

「違う、絶対違う……」

「クククッ、そうかな、お前の女陰はまだいやらしく食いついておるがのう。それにしてもこんな犬が小便をするような体位が気に入るとは。天津の娘はどうしようもない変態だったようだな」

「くっ……」

淫鬼の嘲りに返す言葉もない。

「では今の感覚を忘れぬうちに、もう一度してみるとするか」

先生が生徒に掛けるようなことを言いながら、麻衣を床に着かせる。四つん這いにさせられ、片足は先ほどのように、九十度上げさせられた。

今度は完全に犬が小便をする格好だ。犬がマーキングするかのような格好。しかしマーキングしているのは麻衣ではない。淫鬼がもう俺のものだと言わんばかりに腰を使う。麻衣の膺ひだの隅々まで自分の精液を染みこませる。

「名乗るのがまだだったな。わしの名は灼熱法師。お前をわしのものにしてくれる」

麻衣の脳裏に絶望の二文字が浮かんだ。